

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設番号	
施設名	永山駅前こどもの家
施設所在地	多摩市永山 1-4 グリナード永山 4 階
法人名	株式会社ライフケアサービス

1. 活動のテーマ

<テーマ>

粗大運動

<テーマの設定理由>

園庭のない保育園のため、毎日近隣の公園に出かけている。徒歩圏内に複数の公園があり、魅力的な大型遊具がある。そこまで歩き、思う存分遊び、そこから帰ってくる。そのためには、筋力・体力共に必要。日常的に粗大運動が安全にでき、雨の日でも思う存分身体を動かせると筋力・体力の他に自分の身体をコントロールする力を育めるのではないか。

2. 活動スケジュール

各クラス、年度が終わるまで月に複数回の実施を計画している。また、計画に入れていない日でも、天候によっては活動計画を変更して急遽主活動にしても良いので、月に最低 2, 3 回は活動していく。

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

環境設定として、床に緩衝マット(ウレタンマット)を敷き、年齢に応じてバランスストーン、ウレタンブロック・プレイブロックや室内用ジャングルジムを用意する。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

子どもたちが自発的に動けるように、ブロックの組み合わせを変化させ、バリエーションを持たせる。子どもたちが危機予測ができるような声掛けを心がける。探究活動の様子は動画及び写真で記録する。

子どもの姿・様子	写真
0 才児：パーテーションを複数使用し、大きなボールプールを作る。ボールの中に寝転びダイナミックに手足を大の字に広げ、上下に動かしていた。保育者が体の上にボールを乗せると体をよじって起き上がり、“もう 1 回”というように人差し指を上下に揺らしていた。ウレタンブロックは歩ける子はブロックを抱え移動し積んだり、ブロックの上に乗ったり、しゃがむ・のぼる・投げる等全身運動することが出来た 1 才児：ウレタンブロックとバランスストーンを組み合わせ、プレイブロックを設置すると思いに好きなところに行き、活動を始める。最初は保育者の手を求めている子が多かったが、足を交互に出し階段を登れる子やウレタンブロックの小さな段差からぴよんと飛び降りたり、一本橋を渡れたり、保育者の助けがなくてもできる子が経験を重ねることに増えてきた。 2 才児：室内用ジャングルジムを設置すると、興味津々な様子で保育者が説明する使い方をよく聞いていた。初めて目にする遊具が得体の知れないものに映り、「やらない」と涙する子がいたが、繰り返し見ること少しずつ経験することで拒否感はなくなっていった。慎重な子は他児のやっていることをじーっと見ていた。積極的な子は自ら梯子や吊り輪に挑戦していた。高さのあるところは保育者の助けを借りて一人ずつ慎重に行き、一通りできると、「できた！」と達成感を味わうことができた。高揚した様子で、「○○ちゃんできたね。すごいね！」「○○ちゃんもやってみる」と挑戦しようとする姿があった。活動が終わると、次はいつするのか、期待をもって聞くがいた。	0 歳児クラス  1 歳児クラス  2 歳児クラス 

5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

0 才児は、ボールプールの経験はある子が多かったが、スペースを広くしたことで、ダイナミックに体を動かしていた。ウレタンブロックでの活動では、しゃがむ・持って歩く・のせる等全身を使う活動ができた。大きなウレタンブロックは基本的な粗大運動ができると感じた。1 才児は、興味の強い子は繰り返し登ったり、ジャンプしたり自発的に行っていたが、独占欲も強く他児がなかなか活動できない場面もあった。活動できるサーキットを複数用意すると、興味が分散でき、独占する姿は無くなった。危機予測が不十分な年齢のため、その分保育者の注意すべきことが増えたが、見守り人数を増やし対応した。人数が増えることで、子どもたちの動きを見る目が増え、より多くの気づきになった。高い・怖い・低い・狭い・遠い・近いなど空間や距離について簡単に伝え、慎重にぐる・ゆっくり渡る・座って降りる等の動きが自発的にできるようになり、少しずつボディーコントロールできるようになった。2 才児になると、ジムの高さに挑戦する前に「怖い」という子がいた。保育者がそばにいて・繰り返し経験することで恐怖は克服できた。手足の動きが連動してしまう子がいたが、保育者が手取り足取り伝え、2 回目からは自信を持って取り組む姿があった。成功体験が自信に繋がり、自己肯定感を上げるきっかけになったと思う。すべての年齢に言えることは、体力が付き散歩からの帰り道に疲れて歩けないということがなくなった。
